

# 悪い時代にあっても父のみこころを行う神の家族

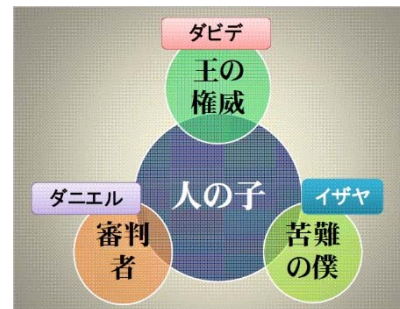
【聖書箇所】 マタイの福音書 12 章 43～50 節

## ベレーシート

●「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」(マタイ 4:17)。イエシュアの三年半におよぶ公生涯は、寝ても覚めても「天の御国」(神の国)のことだけでした。イエシュアのすべての行動(癒し、教え、宣教)はこのテーマに基づくものでした。イエシュアの来臨によって、罪は赦され、いやしの力が働く神の支配のデモンストレーションにもかかわらず、パリサイ人をはじめとする宗教指導者たちはそれを認めようとしませんでした。なぜなら、異邦人による長年の支配(バビロン、メディア・ペルシア、ギリシア、ローマ)から、自分たちの国を解放してくれる政治的メシアを待望してきたからです。マタイの福音書 12 章は、イエシュアがメシアであることをこれでもかと思わせる発言と行いをしているにもかかわらず、彼らはイエシュアがメシアであることを認めようとはしませんでした。彼らの思い込みがそうさせたのです。

## 1. イエシュアのメシアとしての自己証言

●イエシュアは以下の三つのことばで、自分がメシアであることを自己証言しておられるのです。



### (1) 「人の子」という概念

●イエシュアはご自分が政治的なメシアと混同されることを避けるために、自分について「人の子」という表現を用いました。だれかがイエシュアのことを指して「人の子」と言ったのではなく、自分自身のこととして用いられました。ですから、イエシュア以外にはだれも「人の子」という称号を使ってはいません。イエシュアは故意にこの表現で自分のメシア性を表したのです。「人の子」は福音書ではマタイ 34 回、マルコ 18 回、ルカ 29 回、ヨハネ 14 回と使われています。特にマタイは多く使っています。マタイの 12 章だけでも「人の子」という言葉が 3 箇所(8, 32, 40 節)に出てきます。福音書の中でイエシュアが「人の子」と表現しているところをチェックしていくと、「人の子」の概念が浮かび上がってきます。大きく分けると以下の三つに分類できます。

#### ① 王的権威を発動するメシア

●地上での働きにおいて、王的権威をもって人の罪を赦したり、救いを宣言したり、癒しの奇蹟をしたりする「人の子」の姿です。これはダビデの家系から王的権威をもった「ダビデの子」としてのメシアが来ていることを示しています。イエシュアの家系はダビデ王につながっているのです。

#### ② 拒絶される苦難のメシア

●しかし「人の子」による王的権威は、人間の権威によって拒絶され、排斥され、やがて苦しめられて、殺

されます。それがイザヤの示した「苦難のしもべ」としてのメシアです。「人の子は必ず罪人らの手に引き渡され、十字架につけられる」ことが定まっていたのです。当時の人々には受け入れがたい概念でした。

### ③ 未来における審判者としてのメシア

● 死から復活する「人の子」は、やがて再臨され、すべての人をさばく審判者でもあります。これはダニエルが預言した「審判者」としてのメシアです。それは「復活」がなければあり得ないことでした。

### (2) 油注がれた者としてのメシアの特性

● マタイ 12 章では、イエシュアが 6 節で「ここに宮よりも大いなるものがある」と言い、41 節では「見なさい。ここにヨナにまさるものがあります」と言い、42 節でも、「見なさい。ここにソロモンにまさるものがあります」と言っておられます。「宮」(神殿)を司るのは**大祭司**です。さらに「ヨナ」は神のことは語る**預言者**です。そして「ソロモン」は知恵をもって治める**王**です。つまり、12 章だけでも、イエシュアが自分が油注がれたメシアであることを自己証言しているのです。

### (3) 「ヨナのしるし」

● イエシュアをメシアとして受け入れず、もっと大いなるしるしを見せてほしいとする者に対する唯一の確かな証拠は、「ヨナのしるし」だとイエシュアは言われました。「**ヨナのしるし**」とは、**メシアが死んでよみがえることを意味するしるし**です。これこそ、イエシュアがメシアである最終的な、決定的な、究極的なしるしだと言われたのです。しかし、このしるしで悟ることはできないことをイエシュアはご存じでした。なぜなら、この時代を「悪い、姦淫の時代」と呼んでいたからです。この「ヨナのしるし」でイエシュアがメシアであると信じた人はどれほどいたのでしょうか。以下に、①「ヨナのしるし」を見ずして信じた人、②「ヨナのしるし」を見て信じた人、③「ヨナのしるし」を見ても信じなかった人を挙げてみたいと思います。

### ① イエシュアの語る「ヨナのしるし」を見ずして(聞いて)信じた人々

#### a. ベタニアのマリア

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 12 章 3 節

一方マリアは、純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ(328 グラム)取って、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。

● 足に香油を塗ったのは、イエシュアの葬りのためでした。よみがえりのときは、彼女は墓に行ってはいません。

#### b. 十字架上の犯罪人の一人

【新改訳 2017】ルカの福音書 23 章 42~43 節

42 そして言った。「イエス様、あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」

43 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」

● 彼はイエシュアが復活して御国の王となることを信じたのです。「今日」というのは、神が定められた日という意味です。

### ② イエシュアの語る「ヨナのしるし」を見て信じた人々

#### a. 使徒(弟子)たちを含む 120 名の人々

b. **マグダラのマリア**・・彼女は七つの悪霊をイエシュアによって追い出してもらった人です。これは **イスラエルの残りの者の型**と言えるかもしれません。彼女は十字架の時に墓にいて、復活したイエシュアに会った最初の人でした。

●彼女はイエシュアの十字架の時には最後に名前が出て来ますが、イエシュアの復活の時は筆頭に登場しています。ヨハネの福音書には、復活の朝、主が墓でマリアに個人的に顕現されています。なぜイエシュアは彼女に顕現されたのでしょうか。それはマリアがイエシュアを愛し慕って、墓を離れなかったからです。箴言 8 章 17 節に「わたしを愛する者を、わたしは愛する。わたしを熱心に捜す者は、わたしを見出す。」とあるからです。

### ③イエシュアの語る「ヨナのしるし」を聞いても見ても、信じなかった人々

#### ●指導的階級にいた祭司たち、律法学者たち、パリサイ人たち、および群衆

彼らはイエシュアの多くの癒しと奇蹟を見ながら、もっと驚くようなしるしを求めただけでなく、十字架にかかったイエシュアに対してこうも語っています。

【新改訳 2017】マタイの福音書 27 章 39～42 節

39 通りすがりの人たちは、頭を振りながらイエスをののしった。

40 「神殿を壊して三日で建てる人よ、もしおまえが神の子なら自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」

41 同じように祭司長たちも、律法学者たち、長老たちと一緒にイエスを嘲って言った。

42 「他人は救ったが自分は救えない。彼はイスラエルの王だ。今十字架から降りてもらおう。そうすれば信じよう。」

43 彼は神に抛り頼んでいる。神のお気に入りなら、今、救い出してもらえ。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。」

●つまり、自分たちの思う通りにするなら信じようというのが、「悪い、姦淫の時代」の人々の正体です。イエシュアがこの時代の人々の末路について語ったのが、今回取り上げる 43～45 節にあるたとえ話なのです。

## 2. 汚れた霊が戻って来るといふたとえ話

【新改訳 2017】マタイの福音書 12 章 43～45 節

43 **汚れた霊**(「ト・アカサルトン・ブニューマ」 τὸ ἀκάθαρτον πνεῦμα)は人から出て行くと、水のない地をさまよって休み場を探します。でも見つからず、

44 『出て来た自分の家に帰ろう』と言います。帰って見ると、家は空いていて、掃除されてきちんと片付いています。

45 そこで出かけて行って、自分よりも悪い、**七つのほかの霊**を連れて来て、入り込んでそこに住みつきます。

そうなると、その人の最後の状態は初めよりも悪くなるのです。この悪い(「ボネーロス」 πονηρός)時代にも、そのようなことが起こります。」

●45 節の終わりに閉じ括弧があります。これは 39 節の「悪い、姦淫の時代は・・・」から始まっているイエシュアの言われた一連のことばの終わりです。43～45 節にあるたとえ話は何を言おうとしているので

しょうか。イエシュアのたとえ話はすべて御国に関するものであることを思い起こしましょう。以上のたとえ話は、「悪い、姦淫の時代」に起こる話だと言えます。

●ところで、「悪い、姦淫の時代」とは、いつからいつまでの時代のことを言うのでしょうか。それは**イエシュアの初臨から再臨される前まで**です。より正確には、イエシュアの初臨からキリスト再臨前の七年間の反キリストによる大患難の終わりまで、つまり、ユダヤ人がイエシュアをメシアと信じて民族的に回心する時までです。もうすでに2千年近く経っているのです。そこに至るユダヤ人の最後の状態は「**より悪くなる**」という話です。まさにユダヤ人はマグダラのマリアのように「七つの霊に支配された民」として、多くの苦しみを長年にわたって経験するのです。

●すでにA.D.70年には、エルサレム神殿がローマ軍によって破壊され、多くのユダヤ人は殺され、あるいは離散を余儀なくされました。祭司制度も完全に破壊されました。それ以降も、ユダヤ人たちは離散した各国で迫害を受け続けます。1940年代に起こったドイツのヒトラーによるホロコーストでは600万人のユダヤ人が虐殺されています。1948年にイスラエルが復興してからは、わずかずつですが、ユダヤ人の中からイエシュアがメシアであると信じるメシアニック・ジューと言われる人たちが起こされて来ています。しかし未だに多くのユダヤ人はイエシュアがメシアだとは信じていません。パウロの言うように、彼らは依然と「**つまずきの石(=イエシュア)につまずいた**」(ローマ9:32)ままなのです。しかし、やがて定められた時に、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言する**不法の人**(獣と呼ばれる反キリスト)が現われますが、それまで「不法の人」の出現を引き止めているものがあるのです。その「引き止めているもの」とは教会です。しかしその教会が携挙される時、その時こそ不法の人が現われる時なのです。この不法の人の到来はサタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人々に対する悪の欺きがおこなわれるのです(Ⅱテサロニケ2:3~10参照)。多くのユダヤ人たちはこの不法の人をメシアだと信じて、彼と契約を結ぶようになるのですが、契約を結んだ後に、反キリストはその本性をあらわにするのです。そして、自分を神として拝まない者はすべて殺されるのです。

●たとえ話に戻ります。イエシュアが来臨して汚れた霊が追い出される時代が来たのです。しかしイエシュアをメシアだと信じないでいるなら、家を空き家にしていることと同じなのです。ひとたびそこから出て行った霊が戻って来て、自分よりも悪い、七つのほかの霊を連れて来て、入り込んでそこに住みつきます。そうなるとうなるか、「**その人の最後の状態は初めよりも悪くなるのです**」とあります。これが「**悪い、姦淫の時代**」(39節)、「**悪い時代** (新改訳第三版では「**邪悪なこの時代**」)」(45節)の姿なのです。この状態は未だに(今日においても)変わらないのです。

●パウロはこれを「福音に覆いが掛かっている」状態だとしています。「滅び行く人々に対して覆いがかかっている」、それは「この世の神が、信じない者たちの思いを暗くし、神のかたちであるキリストの栄光に関わる福音の光を、輝かせないようにしているのです(Ⅱコリント4:3~4)。」と記しています。しかし神はアブラハム契約を覚えておられ、やがて「**終わりの日**」にこの覆いは取り除かれるのです。

## מִתְּוֵי

●旧約聖書に主が制定された「例祭」があります(レビ 23 章)。右図がそれです。主の例祭はすべて神の不変のご計画のマスタープランを啓示しています。春の四つの祭り(過越祭、種なしパンの祭り、初穂の祭り、七週の祭り)が示唆する預言的な意味は、メシア・イエシュアの初臨によってすでに実現しています。しかし秋の三つの祭りが意味する預言的出来事は、これから実現することです。つまり、秋の祭りが意味することはメシア



アの再臨によってはじめてこの地上に実現することを示唆しています。その秋の例祭に「贖罪日」(「ヨーム・キツプール」יּוֹם כִּפּוּרִים)があります。この「贖罪日」が指し示している預言的意味は、悔い改めによる全イスラエルの民族的回心の実現です。神の側では神の恵みによってそのお膳立てはすでに整っています。しかし、全イスラエルの民の方が未だ整っていないのです。そのことに気づかせ、全イスラエルの民を民族的に悔い改めさせ、主に立ち返らせることが、「贖罪日」が意味していることなのです。

●神の民イスラエルが犯した最大の罪は、神の御子イエシュアを拒絶しただけでなく、スケイプゴートとしてイエシュアを十字架につけたことです。さらには、獣と呼ばれる反キリスト(不法の人)をメシアとして信じるようになります(姦淫の罪)。そうした罪に気づかせるために、神は彼らに反キリストによる大患難を通させ、未曾有の苦難をもたらします。しかしゼカリヤ書 12~14 章には、イスラエルの民がどのようにしてメシアを受容するかが語られています。12 章 10 節と 13 章 1~2 節には以下のように記されています。

【新改訳 2017】ゼカリヤ書 12 章 10 節

10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、**恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。**

【新改訳 2017】同書、13 章 1~2 節

1 その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、**罪と汚れをきよめる一つの泉が開かれる。**  
2 その日——万軍の【主】のことば——わたしはもろもろの**偶像の名を、この地から絶ち滅ぼす**。それらの名はもう覚えられない。わたしはまた、その預言者たちと**汚れの霊をこの国から除く**。

●この預言は「ダビデの家とエルサレムの住民の上に」となっていますが、他の預言書も加味合わせると、神はユダのみならず、イスラエルの全家を一つにされます。そして彼らは二度と身を汚すことがないようにされるのです。**ここまでして、主はユダヤ人(イスラエル)を「悪い、姦淫の時代」から救い出されるのです。**反キリストによる大患難をくぐり抜けた 1/3 のユダヤ人は、キリストの再臨の前に、聖霊の傾注によって、「自分たちが突き刺した者(イエシュア)」と「主を仰ぎ見」て、神とメシア・イエシュアが一体であったことに霊の目が開かれます。そしてメシアを拒絶したことがどんなに大きな罪であったかを示されて「激しく泣く」のです。尋常ではない「苦しみを伴ったひどい悲しみ」となります。そうした民族的回心があって、キリストの地上再臨が来るのです。こうしてイスラエルは、マグダラのマリアのように、主を愛

するようになるのです。万軍の主の熱心さによって、将来必ず実現されるのです。

### 3. 「父のみこころを行う」神の家族

●「悪い、姦淫の時代」の中にあってもそれに流されることなく、父のみこころを行う主の家族がいるのは、御国の民にとって一縷<sup>いちる</sup>の望みです。

【新改訳 2017】マタイの福音書 12 章 46～50 節

46 イエスがまだ群衆に話しておられるとき、見よ、イエスの母と兄弟たちがイエスに話をしようとして、外に立っていた。

47 ある人がイエスに「ご覧ください。母上と兄弟方が、お話ししようとして外に立っておられます」と言った。

48 イエスはそう言っている人に答えて、「わたしの母とはだれでしょうか。わたしの兄弟たちとはだれでしょうか」と言われた。

49 それから、**イエスは弟子たちの方に手を伸ばして**言われた。「見なさい。わたしの母、わたしの兄弟たちです。

50 **だれでも天におられるわたしの父のみこころを行うなら、その人こそわたしの兄弟、姉妹、母なのです。**」

●46 節に「イエスがまだ群衆に話しておられるとき、見よ、イエスの母と兄弟たちがイエスに話をしようとして、**外に立っていた**」とあります。母マリアと兄弟たちとあります。イエシュアの兄弟たちとは、マタイ 13 章 55 節によれば、「ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダ」です。姉妹たちもいましたが、ここでは同行していません。彼らはイエシュアに話をしようとしていたとありますが、マタイはその理由を記していません。いずれにしても、イエシュアの周りには群衆がいっぱいで、家に入ることができずに、外に立っていたのです。「外に立っていた」の「立っていた」は現在完了形で、中に入らず外で「ずっと立ち続けている」ニュアンスです。

●そのときイエシュアは「わたしの母とはだれですか。私の兄弟たちとはだれですか」と思いがけないことばを突き返しています。一見すると、肉の家族を軽視するような発言です。しかしイエシュアは公生涯に入られた時から、彼の関心は「御国」のことだけでしたから、何よりも御国を第一にすることを教えていました。例えば、8 章 21 節で「主よ。まず行って、私の父を葬ることを許してください」と言ったひとりの弟子に、イエシュアはこう言われました。「わたしについて来なさい。死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。」とか、10 章 37 節にあるように「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません」と教えていました。これらは、既成の家族よりも、御国のことを第一にすることを教えていたのです。ですから、ここで自分の家族に対しても同様だったのです。家族の絆を重んじる人たちにおいては、これはつまづきをもたらします。しかしイエシュアは自分の家族よりも御国の家族を優先することを教えられたのです。

●49 節の「手を**伸ばして**」(新共同訳「**を指して**」)と訳されている箇所ギリシア語は「エクテイノー」(ἐκτείνω)という動詞です。8 章 3 節でツアラアトの人に「イエスは手を**伸ばして**」とか、12 章 13 節に

も片手の萎えた人に「手を伸ばしなさい」も「エクテイノー」(ἐκτείνω)です。ヘブル語で「(手を)伸ばす」は、普通「シャーラハ」(נלח)が使われるのですが、49節のヘブル語訳だけは「ナーター」(נחט)という動詞の未完了3人称単数「イエート」(יאת)が使われています。この動詞の初出箇所は創世記12章8節で「天幕を張る」という意味で使われています。「天幕を張る」のは家族が住むためです。つまり「**イエスは弟子たちの方に手を伸ばして言われた**」とは、イエシュアが弟子たちと共に住むための天幕を張ること、すなわち、**御国において共に住む家族を指して言われた**ことを意味しています。ですから、イエシュアは弟子たちのことを「**見なさい。わたしの母、わたしの兄弟たちです**」と言っているのです。

●このことが天の御国について語っていることは言うまでもありません。それは「終わりの日」を意味する「**見なさい**」(「ヒンネー」(הנה)という言葉がそのことを示しています。46節である人が、「ご覧ください」(「ヒンネー」(הנה))と言ったことに対してすかさず反応して、イエシュアは「わたしの母とはだれでしょうか。わたしの兄弟たちとはだれでしょうか」と問い返しています。公生涯に入られてから、イエシュアの関心とすべての働きは「御国」に注がれていることが、ここにも強調されています。そのことを決定づけるかのように、天の御国における家族とは既成の家族を超えた霊的な家族です。その家族とは、イエシュアの弟子であるもの、すなわち「**天におられるわたしの父のみこころを行う者たち**」のみであることを語っています。御国では父のみこころを行う者でなければ、主の家族にはなれないのです。

●イエシュアの母と兄弟たちは、イエシュアの「外」にいました。それは彼らが「御国」の「外」にいたことを意味しています。「外」ではなく、御国の民であるためには、御国の「内」にいないといけないのです。イエシュアの母と兄弟たちはこのときは「外」にいましたが、イエシュアの復活後には弟子となっていたのではないかと思います。なぜなら、使徒の働き1章14節に「彼らはみな、女たちとイエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、いつも心を一つにして祈っていた」とあるからです。

●**天の御国における家族の概念は、私たちの血のつながりを越えた新しい世界です。**なぜなら「血肉(生まれながらの)からだは神の国を相続することができない」とあるからです。キリストの花嫁である教会に属する者も死からよみがえり、生きている者は新しいからだに変えられなければならないのです。これを「第一の復活」と言います。反キリストが支配する大患難時代にイエシュアをメシアとして信じて殉教したユダヤ人や異邦人も、キリストの地上再臨の時にこの「第一の復活」にあずかることができます。「この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者です」(黙示録20:6)と言われます。ちなみに、御国の「外」にいる人もよみがえりますが、御国が完成する千年王国の時にはなく、それが終わった時に復活し、同時に「第二の死」が定められています。主を信じて「第一の復活」にあずかる者には、「第二の死」は何の力も持っていないのです(黙示録20:5~6)。あなたはその中に入っているでしょうか。入っていないければ、完全に御国の「外」にいることになり、永遠のさばきを免れることはできないのです。

●以下にあるイエシュアのことばを、しっかりと心に留めたいと思います。特に、「わたしにふさわしい者とはどういう者なのか」という点に注目してください。

## מתי

【新改訳 2017】 マタイの福音書 10 章 34～40 節

- 34 わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っははいけません。わたしは、平和ではなく剣をもたらすために来ました。
- 35 わたしは、人をその父に、娘をその母に、嫁をその姑に逆らわせるために来たのです。
- 36 そのようにして家の者たちがその人の敵となるのです。
- 37 わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。
- 38 自分の十字架を負ってわたしに従って来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。
- 39 自分のいのちを得る者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを得るのです。
- 40 あなたがたを受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。また、わたしを受け入れる人は、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。

●家族を大切にする人にとっては上記の主のみことばはつまずきとなるかもしれません。特に、ユダヤ人の家族はそうです。家族の中にひとりでもイエシュアをメシアだと信じる者が出ると、その家では葬式がなされると言います。日本も家族の絆は強い国と言えます。しかし、この主の**ことば**をそのまま信じて受け入れることが、「**父のみこころを行う者**」と言えるのではないのでしょうか。この世における家族はやがて終わります。しかし御国に生きる者は、主にある新しい神の家族があることを心に留めたいと思います。

2019.4.7